安道を得清正ハ咸鏡道を得たり是より於て清正安城の居民二人を擒く道の向導となせり二人共より詳しくる此地より生長して北路を存ぜりと云清正一人を斬て捨てし八一人懼れて先導仕らんと請ふ谷山の地より老里峴を踰えて鉄嶺の北より出て日より行事數十里勢ひ風雨の如く北道の兵使韓克誠ハ鎮沙寧永興延川端川穩州隨城の兵を率ひて海汀倉より行遇たり北道の兵ハ騎射を善く地又平衍なれど朝鮮勢左右より分れてこれを出且馳せ且射るを以て退て倉中に入る時に日已に暮れ軍士も亦休ひて敵の出るを俟て明日復戦ん

むと云れども韓克誠聽入れず軍率を指揮して之を取圍む日本勢ハ倉中の穀石を取出し列置き城と為し以て矢石を避け其内より多く鳥銃を發ちて朝鮮の軍兵櫛の齒を以つたるごとくなるを立て重疊して束ねるが如くなるこうば中れハ必貫穿し或ハ一丸に三四人を打斃さし一軍遂に大崩れとなりぬ克誠ハ兵を收めて退き嶺上に屯し天明を待て又戦ふに日本勢ハ夜潛に朝鮮の軍の後ろを環て敢て草間に伏居たり翌朝に大霧して物の見分けも成難きとき朝鮮の軍勢ハ猶も敵兵ハ山下に在ると思ひ忽ち一聲の銃砲響く程にあれ四

面よりて大に喚ひ叫んで突てゝる皆日本勢也朝鮮勢敗き大崩れて奔走し悉く泥沢の中に陷る處を日本勢追つめて撫で切に其数さゝ者數を知らず克滅やう〳〵道に出て鏡城に入て遂に擒にせられぬ両王子陪海君順和君ハ俱に會寧府に至る蓋し順和君初め江原道に在て〻敵兵ども江原道に攻入けるゆゑに道を轉て北道に向て是時日本勢王子を追詰来る會寧の吏鞠景仁と云者同類を率て謀叛して王子及び從臣を縛て日本勢を迎へ〻敵將清正其を解き軍中に留め置き引返して咸興に屯し溟溪君尹卓然ハ路中に病ひと称して路をこの別害堡をすて行ぬ同知李暨ハ王子に從て江原道に留まりゆゑ皆執て仕を免れて柳永立ハ敵の陣中に數日拘へられて居たり〻の敵も文官と思ひ防禁ゆるゝ間に乗て脱し走て行在に来りぬ

小西行長押陰大同江之事

日本去程に小西行長ハ安城駅より加藤清正と立別し鳳山迄来て國王平壤におくまんより聞えしは黒田長政宗義智と同く路程を急ぎ遂に六月十日大同江の南岸に到て前隊の兵數百騎進むで江中に馳せ入て〻江中

の小島ニ居住セル士民共大ニ驚き周章て〻東西ニ北ゲ
走る小西ノ軍勢猶〻進むで大同江を一息ニ渡らんと皆
〻馬ニ乗入れ〻游ぎて既ニ岸近くなりたる處ニ北岸
の朝鮮勢の中より精兵をえらびたるを見て指詰引詰裾
は同じく渡ニ掛りし軍兵ども的ニなりて十騎計射斃されし
ものは小西ノ勢進みうね遂ニ本の岸ニ引返し南岸ニ陣
を取り北岸ハ朝鮮勢守ニ居けり

朝鮮 李鎰ハ既ニ忠州ニて敗軍し江を渡ニ江原道の界ニ
入ニさまざまと轉輾して平壤の行在ニ至る時ニ朝鮮の
諸將ハ京城より南方ニ下ニ或ハ討死し或ハ逃走ニて一

人も駕ニ從ふ大將無く敵將ニ至らんと聞えしかは人心
益懼れあひぬ李鎰ハ武將の中ニも素より重名有れハ敗
軍の將なれども人〻其來ると聞て喜ぶぬハ無ニそ李
鎰ハ既ニ屢敗軍し荊棘の中ニ竄れ忍ひて頭ニハ平凉子
竹笠の事なりと載き身ニ白布衫と穿ち朝鮮の土民履をみとゝ云とはけ
て至る形容憔悴たるを觀て歎息せぬハなし柳成龍云此
處の人皆公ニたのみて力らとなりて而るに枯槁の如く衰へぬ
る体ニよりて何と以て諸人の心を慰めんと行槖旅中の
中より藍色の紬袴裏ちらつくを出しとして與へけり
是ニ於て諸宰臣或ハ駿笠馬尾ニて作たる笠或ハ銀頂子笠の上の飾せ

餙の彩纓の緒等と與へ一くさると目前にて著換へ給ひ服の餙
を一きれ新しく成るを獨り靴を脱て與へる者なるを
けるに故猶も草履を著て居たりしに錦衣を草履ハ釣合ん
ぬと諸人一笑せり斯て碧潼の土兵任旭景と云者物見の
註進として敵軍已に鳳山まで来ると告げるを然る
に詠歸樓下の水ハ二つに成て浅くして渉るべし下
萬一敵軍朝鮮の土民を案内せば暗に江中を渡て猝に押
寄来らば城を危き事なるべしこの浅瀬を渡て守ら
むべしと李鎰に遣ハし李鎰萬須臺の下に至て城を距
ること僅に十四里日本の一里餘江南の岸を望み見るに敵兵来て聚

る者已に數百江中小島の居民共驚き叫て逃散ル李鎰急
に軍士十餘人をして島中に入て之を射ると云軍士畏
れて進まず李鎰劍を拔て之を斬らんと欲し然後人みな
進て敵ハ已に江水の中に打入て多く岸に近つく
と朝鮮の軍ハ急に強弓を以て之を射連るに七人
射斃せば日本勢遂に引退く李鎰仍て留て渡口を守ると

重軍勢渡海朝鮮之事

日本去る二月太閤秀吉數萬騎の軍勢を朝鮮に遣し朝鮮
既に破しめしバ定て明より援兵の来らん歟と慮て旦都
城の制法諸士の押一の為めに奉行を始め又數萬騎の軍

勢を指向ふる一番は増田右衛門尉長盛石田治部少輔三成大谷刑部少輔吉隆前野但馬守長泰加藤遠江守光泰と一列に二番は浅野左京大夫幸長宮部兵部少輔南條左衛門尉木下備中守盛屋新五郎齋村左兵衛尉中川右衛門大夫秀政別所豊後守明石左近一柳右近将監遠藤右馬丞吾出羽守竹中源丞石河備後守服部采女正と一列に三番は池田少将輝政細川越中守忠興長谷川侍従秀一木村常陸丞岡本下野守小野木縫殿丞野村兵部少輔糟谷内膳正片桐東市正直盛舎弟主膳正貞隆高田豊後守吉田兵部少輔藤掛三河守太田小源太早川主馬正毛利兵部少輔

亀井武蔵守茲矩を一番とせり茲は伊達陸奥守政宗は會津を領せられ又二本松も討てられを取られる去る天正十八年相州小田原陣の時太閤は謂られ此時浅野彈正大弼長政を以て朝鮮は渡海せむ事を望まれこうば大閤許容有て長政も嫡子左京大夫幸長を召つれ政宗と倶に朝鮮へ赴る名田三成増田長盛大谷吉隆等は大閤の朱印を持られ六月諸勢名護屋と發船は其書の略小諸士不敢怠惰横行于朝鮮大明儼其武備正其製法而可也と云斯て重て指向られ憂の諸軍勢朝鮮へ著陣有しは先達て渡て迄たる諸卒弥勇をなし日々諸邑を侵し掠め攻

取る霧の城くゝよ人數を籠め置て守らゝむ先つ釜山浦の
堅うゝ筑前中納言秀秋目附役太田小源太安骨浦ゝハ立
花左近少監宗茂加德ゝ高橋九郎紫上野ゝ竹島ゝハ
毛利久留米侍從秀包西生浦ゝ淺野左京大夫幸長太田
飛彈守其外王城迫の城くゝ軍勢を分て守らせ諸軍使
わゝ平壤と指て押寄ゝ

朝鮮　遼東の都司某ゝ怪しみ鎮撫林世祿をして倭
情を探らゝむ為ゝ朝鮮ゝ來らゝむ柳成龍是の命を承て
唐將の接待を致せ（馳走役也）此時遼東ゝハ日本ゝより朝鮮を
犯ゝと聞き未ゝ久しゝして又都城も陷て國王西ゝ

遷ると聞ゝ既ゝ又日本勢平壤迫至ると聞ゝしゝば甚
ゝしと疑ひて以為日本勢の變いの早ど急なるゝも箇程
猝遽ゝ付有べゝ或ゝひゝ朝鮮ハ日本の為ゝ先導と
為ゝ為ゝむと疑ひぬ柳成龍其疑いと霽ゝしめむ為ゝ相
伴ゝ練光亭ゝ上て形勢を望ゝ見せゝるゝ折ゝ一人
の日本人江東の林木の間ゝより作ち見ゝ作ち隱せゝるゝが
已ゝして二三人も繼ぎ出或ハ坐ゝ或ハ立意態安閑と
て道路ゝ休息ゝる狀の如ゝ成龍指示ゝて世祿ゝ云ゝ
ハ此日本の物見ゝ世祿柱ゝ倚ゝて望ゝ見て殊ゝ
不信の色有て日本の兵ハ何ゝて斯ゝ遲ゝやと云ふ成龍

う云日本ハ巧〻て詐謀多く大兵後に在て雖先来て偵ひ探る者數輩に過ぎず若し其ぶと見てこれを忽に出る時ハ必敵の術に陥らむと云世禄なかづきて亟に回答（證書付）と求めて馳せ去れぬ

玄蘇調信會李德馨之事

日本去程に小西行長ハ平壤に著陣たるの京城の諸將一使を馳て平壤を攻落さむ支掌の内にあれど不日に平壤城を陥いるも其ゝ鴨緑江を濟て明に打入るべき旨を云ひ遣こ宇喜多秀家を始め諸將評議有て全羅慶尚の各郡まず悉くしたがひ後ろに大敵を置かゝ鴨緑江を渡

つたゞ敵の大軍我後ろを襲ふの前後に敵を受けるばに進退いかゝむ先重兵を京城に駐め舟手の勢を以て西の方全羅に向て遠く西海道をへて大兵水陸に並び進むで戦ふ支全計たるべし猶良策を廻らゝ

ゝ答へなり是に於て行長思慮を廻らし僧玄蘇柳川調信に命じて朝鮮李德馨に書簡を送て直談せむ支を云遣しけゝ德馨小船に乗て出来て玄蘇調信等と面談し玄蘇云く日本道を朝鮮の道路に明に通せむと欲し朝鮮これを拒むに此の如く干戈をかゝる今て領掌有らば無事に成らむと云李德馨返答に先兵を引

取れよ其上にて和議を成すべしと云調信等日本勢の勇猛斯のごとくなる上は和談に随うしたがひ實に朝鮮は粉にすべしと諭せど德馨默して遂に各別れ去る日暮れうど小西はそれ軍勢を押出し大同江の東岸に陣を張て回天の氣をぞ顯しける

朝鮮

左相左議政尹斗壽に命ぜ都元帥金命元巡察使李元翼等を率ひて平壤を守らしむこの時已に城を出らるべきを定めもどる何方をもて適む所を知べし朝臣多く言ふ北道の地僻にして路も險なれば以て兵禍を避くるに宜しと蓋し是時敵軍已に咸鏡道を犯して道路通ぜざれば其變を報る者なく故に其たを知ざる也是に於て同知李希得曾て永興の府使たり時惠政有て民の心を得たるを以て咸鏡道の巡察使に兵曹佐郎六曹に正郎佐郎各有金義元從事官とし北道に往しむ而して内殿王妃及び宮嬪以下先城を出て北に向ひ諸士議論區々たり知事韓準何分にも北道に向くべし事便利なりと申ども内殿遂に咸鏡道に向くる時に敵大同江に至て已に二日ふ及ぶに柳成龍等陳光亨に居たりて江の向ふる一人の日本人才の先きに小き紙を付け江沙の上に立置たを火砲匠金生巖とて小船に棹さして往てこれを取

もふ日本人の兵器を帯らざる者出来て金屏風に書と附して以て送りぬ其書至て閑き視れば書面に朝鮮國礼曹判書李元翁下に上る有て蓋し李德馨に與ふる書にして平調信柳川豊前守玄蘇仏巣が書を〻むる處なり其書の大槩德馨に見えて和講を議せむとなり因て德馨扁舟に乗て平調信玄蘇に江中にて會し相勞問らる事平日の如し玄蘇云日本路を借て中國に通ぜしめば事無らむと云德馨兵を退きて後和講を議せむと云調信等應對の語頗る不遜なり遂に双方別れて去る其夕べ日本勢數千人江東の岸上に陣を張る

小西行長等大同江岸對陣之事

日本斯て小西行長宗義智松浦鎮信有馬義純大村純忠五島純玄等數軍を率ひて平壤城を攻むとて江岸に屯し先手の兵は内に河一馬を乗り入れども水深けれバさ〻渡るべきもなく擬勢ばかりなり中くやとけり又歩兵乃中に大兵のものに長さ五六尺又ハ七八尺計の大刀を木にて作り銀箔を押たるを各ふりかゝげ往来しるしバ日に映じきらめきけり其程遠くれども城兵も木刀にて知らぬるの此大刀にも氣を奪はれ大に怖れたりと見えて日本勢ハ江を隔てゝ城に向ひて頻に

鉄炮を打掛け朝鮮勢ハ精兵の射手と勝て舩のせ川乃中流ゟ至て寄手を射させるるもの大河なれゞ日本勢もはゝなく渡てでもこらびされども久〳〵雨降らび尋常の川〳〵は渇水せる折なれバ浅瀬〳〵る知て無二無三ゟ押わたるを切まくる程なるバ朝鮮勢の怯弱直ゝ撃破らむ事や有るを善し大雨降つゞきの水ゝを増る程なるばいよ〳〵渡て難ゝ〳〵む今の内ゝ事なるべと各氣〳〵らもたるる評議して何國欤浅瀬なるむと諸軍日〳〵河邊一出て水面を彼方此方と見廻せども未ゞ浅瀬と覚しき処を考へ當らゞ只河水の一面ゟ滾〳〵と流るゝを見る計ゟていゝむ〳〵も為べき方なく十餘ヶ所ゟ陣を取て互ゟ河水を阻て〳〵日〳〵矢炮の迫合のゝゝ此河し〳〵越らゞくも見えさりゝゝ諸軍勢手弓を摩て頗る退屈の色見えゝゝ

朝鮮

六月十一日國王八平壤を出て寧邊ゟ尚ゝる大臣ゟ崔興源俞泓鄭徹等扈從し左相尹斗壽元帥金命元巡察使李元翼を平壤の留守〳〵柳成龍も六唐將接待〳〵て〳〵〳〵留る是の日日本勢城を攻む尹斗壽金命元李元翼柳成龍練光亭ゟ居たゝ本道平安道の監司宋言慎大同城の門樓を守る兵使李潤德浮碧樓ゟ上の江灘を守る慈山の郡守尹裕俊等長慶門を守る城中の士卒民夫合て二四